

# 新技術 解説

## ダリアのウイルス・ウイロイド病の診断と防除

奈良県農業研究開発センター

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構  
野菜花き研究部門 花き生産流通研究領域

宮崎県総合農業試験場

あさの しゅんすけ ひらやま よしひこ よしだ かんだい  
浅野 峻介\*・平山 喜彦・芳田 侃大\*\*  
まつ した よう すけ  
松 下 陽 介  
なか むら かおる  
中 村 薫\*\*\*

### はじめに

国内の花き生産額が年々低下している中、ダリア切り花の生産額は増加傾向にあり有望な品目となっている。従来は仏花としての需要が主であったが、近年ではブライダルやパーティー等の業務用需要を中心に、フラワーアレンジメントに欠かせない花材となっている。

ダリアは冷涼な気候を好む植物であるため、夏秋期には奈良県や兵庫県の中山間地域と山形県等の冷涼地に産地が形成されている。これらの地域では、夏秋期の切り花生産とその後の球根生産を組合せることによって、労働力の周年活用が図られている。また、近年増加している冬春期の切り花生産は、従来産地ばかりでなく長野県、愛知県、高知県、宮崎県等全国各地に導入されている。

ダリア生産では、糸状菌病であるうどんこ病、斑葉病および菌核病、細菌病である根頭がん種病による被害は少ない一方で、ウイルス・ウイロイド病による被害が問題となっている。生産現場における増殖は、夏秋期産地では主に球根（塊根）の分球、冬春期産地では挿し芽によって行われている。そのため、ウイルス・ウイロイドに感染した母株から後代に伝染し、その被害が拡大している。

そこで、2013～15年度に農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業実用技術開発ステージ「無病球根の効率的増殖を核とした有望球根切り花の生産流通技術開発」において、ダリアのウイルス・ウイロイド病の診断・防除技術の開発に取り組んだ（浅野ら，2019）。本

Diagnosis and Management Guide to Virus and Viroid Disease of Dahlia. By Shunsuke ASANO, Yoshihiko HIRAYAMA, Kandai YOSHIDA, Yosuke MATSUSHITA and Kaoru NAKAMURA

（キーワード：病徴、伝染源の除去、感染予防、TSWV、DMV、CSVd）

\*現所属：奈良県北部農林振興事務所

\*\*現所属：奈良県庁畜産課

\*\*\*現所属：宮崎県東臼杵南部農業改良普及センター

稿では本事業で得られた成果を紹介する。

### I ダリアでの主要なウイルス・ウイロイド病

ダリアには複数のウイルス・ウイロイドが感染することが知られており、全国での発生調査の結果、ダリアモザイクウイルス（DMV：dahlia mosaic virus）、トマト黄化えそウイルス（TSWV：tomato spotted wilt virus）およびキク矮化ウイロイド（CSVd：chrysanthemum stunt viroid）による被害が大きいことが明らかになった（ASANO et al., 2015；2020）。一方でキュウリモザイクウイルス（CMV：cucumber mosaic virus）、タバコ条斑ウイルス（TSV：tobacco streak virus）については感染報告があるものの、その被害は小さい。

#### 1 ダリアモザイクウイルス（DMV）

DMVによるダリアモザイク病の病徴は、葉のモザイク症状（図-1-1）、葉脈黄化（図-1-2）、稲妻状や斑点などのクロロシス（図-1-3）、萎縮（図-1-4）が生じ、植物全体の生育が抑制される。品種、生育ステージ、気温等により病徴の程度は様々である。潜在感染もしくは病徴が軽微な時期が多いため、目視のみでの健全株の選抜

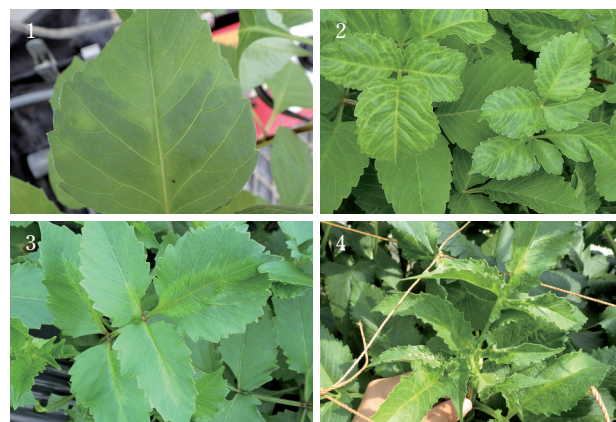


図-1 DMVによるダリアモザイク病の病徴

- 1) モザイク症状
- 2) 葉脈黄化
- 3) 稲妻状のクロロシス
- 4) 萎縮症状